福岡大学法科大学院
令和6年度C日程小論文試験
出題趣旨・採点基準

[出題趣旨、評価・採点基準]

設問1

問題の全文を読み、筆者の主張を前提に、そこから導かれると思われる問題を記述する。読解力・分析力・表現力を判定する趣旨。

本文内容を正確に読み、「現実」についての2つの契機の意義、その延長戦にある第3の契機の意義について、筆者の考え方を分析・検討し、それを的確に表現できているかが、評価のポイントとなる。

設問2

筆者の主張を読んだ上で、その主張から導かれる「現実」との向き合い方を記述する。設問1の各能力のほか、思考力を判定する趣旨。

本文内容の正確な理解とそこから考えられる筆者の考える「現実」との向き合い方を的確に判断し、それを的確に表現できているかが、評価のポイントとなる。

【解答例】

以下はあくまで例で、これ以外の解答が直ちに誤りであるという趣旨でない。

設問1

「筆者は、日本人の考える現実観として、その所与性・次元性を挙げる。

筆者によれば、まず、現実の所与性とは、与えられたもの、既成事実との等置ないしそれへの屈伏を意味する。従って、過去に形成されてきたもののみが現実として捉えられ（現実の過去性）、「作られる」という変化の契機を含む存在でない。

また、筆者によれば、「現実」とは、本来は相矛盾する契機を含む多元的な存在である。しかし実際には、好ましい（ないし好ましくない）と考えられる側面のみをとりあげて「現実」と考えるという価値判断を行い、その取り上げられた「現実」のみを現実と考え、それと矛盾・対立する別の現実は一切捨てられている。しかもこの場合、取り上げられる「現実」は、メディアなどを通じて流布されるものに限られた一面的なものでしかない（現実の次元性）。

このように、日本の「現実」観にみられる、既成事実としての現実、現実の一面性を前提とすると、既成事実のみが「現実」の契機であること、ないし、既成事実と矛盾しない限度において取りうる施策を取ることが「現実的存在」である。既成事実と矛盾し、あるいはそれを変革する方向性は、「非現実的」と判断されることとなる。これが第三の契機と考えら

れる。」

(付記) 出典の原論文では、第1・第2の契機から演繹される第3の契機として、時の支配権力の選択する方向性が「現実的」とみなされ、それに対立するものは非現実的とされるという点を提示している。

筆者の挙げる第1・第2の例はいずれも戦前の例であるが、権力者が既成事実を前提として行動し、それを変えるという観点を持たず(第1の契機)、既成事実と対峙するモーメントを切り捨てている(第2の契機)ということを強調している。従って、個々から第3の契機としては、権力者の選択した方向性のみを現実的とみなすという第3の契機が導かれる。

ただし、この「正解」を求めることは実際には難しいと思われる。従って、評価基準としては、この「正解」に言及されずとも、論者のいう第一の契機、第二の契機の内容から見て、そこから演繹されるであろう帰結について、論理的にみて矛盾なく論じられているかどうか重要である。その際、第一の契機・第二の契機が何かについて、必ずしも明示する必要はないが、それを踏まえているかどうか、重要な基準となる。

設問2

「筆者によれば、現実とは、本来であれば不変の存在でもなければ一つだけの存在でもなく、むしろ、変わりうる存在でもあり、対立・矛盾する契機をはらんだ多元的存在である。これに対し、日本の現実観は、現実を所与の存在・一次元的存在と考えていることにあり、このことが既成事実への追随と諦観、既成事実から出発する以外の選択肢を持ちえず、時の政治権力に流される結果を生むこととなっている。

従って、現実に向き合うにあたっては、「現実」も所与の存在でなく変わりうる存在であり、また、既成事実と対立する「現実」が存在するという現実の多元性にも目を向ける必要があることとなる。それ故、政治権力の目指す方向性のみが現実的なのでなく、それと対立する方向性であってもそれは十分に現実的と言い得ることを認識する必要がある。」

(付記) 設問1の「第三の契機」の意味は、原論文では上記の通りとなるため、設問2の解答もそれに即する形とした。但し、設問1で上記「正解」に到達することは難しいと思われるので、問題1の解答で示された第三の契機が、「現実」に対しどのように向き合うべきかについて考えるものとなっていれば、解答内容として不適切とはいえないであろう。